

日本民衆史に残る体験

東日本大震災は千年に一度という経験で、このとき庶民が何を考え何を訴えたかを知ることは、私たち民衆史に携わるものにとって極めて重要な機会である。本書は巨大地震、大津波、

発の重大事故について、19編の証言や訴え、告発などが胸を打つ。「果てなき流浪へ」（福島県浪江町の新田さん）、「真実は避難者には知らされない」（南相馬市の池田さん）、「政府も誰も信用できない」（福島市の嶋原さん）。なんとこの悲しい訴えであろうか。

この記録には仙台市での

「おじいさんは大好きな海に帰ったんだ」と祈るように記した宮城県石巻市の丹野さん、「祖母の手を放してしまった」と悔恨の情をつづった七ヶ浜町の渡辺さん、「夢半ばで逝った息子を想う」とつづった名取市の小原さん、津波に流されながら生き延び、「供養

地震の経験も記されている。とくに高層マンションでの震度6の揺れの報告は、首都直下型大地震が近いとささやかれている今、人々には見過ごせないだろう。そうした事態に備える行政の準備は大丈夫だろうか。市民ひとりひとりの心構えも問われている。

3・11慟哭の記録 金菱清編

碑の下の石を拾い集める日々」を書いた岩手県大船渡市の及川さんの記録などは、未曾有の体験だけにその価値は日本民衆史に残るものである。

また、いまだに解決のメドさえ立っていない福島原

大震災ではおびただしい帰宅難民が出た。また、起こる可能性の大きい住宅火災の広がりにはたいする備えも必要であろう。私たちは日本という地震列島の上に住んでいるのである。そうであれば日常不断の覚悟を持つことが必要なのである。

記録という点から言え

ば、大地震と大津波で家を離れた20万人とも30万人ともいわれる避難民の人たち

にも、この本に倣った被災の経験を書き残してほしい

と思う。（色川大吉・歴史家）

